

「馬に乗った丹下左膳」という評論の中で、劇作家の別役実が、「発明の幻想時代」の象徴として飛行船を挙げている。「神のみが創り賜う」領域に踏み込んだ結果が、その余りに巨大でグロテスク（＝優美）な姿態であり、内包する危険にあると。そして、幻想時代の終焉は一九三七年、謎の爆発で世界を震撼させたヒンデンブルグ号の最期によって訪れる。

テロの標的となった世界貿易センタービルと重ね合うように、ヒンデンブルグ号のニュース映像を思い起こした。センタービルもまた巨大であり、優美であり、結果的に危険を内包した「文明の産物」であったとも言える。異教の暴徒が「神への挑戦」に対する懲罰をも意図したとすれば、何か因縁さえ感じる。

別役は、飛行船以降を「実用重視で幻想領域を超えた、発明発見物語の第二の時代」と呼ぶ。同じ流線型でも、飛行船はまがまがしいほどに感動的だが、新幹線は単純な機能美に過ぎないと。超高層ビルもまた、文明の力は感じさせても、神秘的な魅力には乏しい。

しかし、「第二の時代」に内在する最大の問題は、「幻想」と「現実」の領域が曖昧化し、神と人間の領域の境界が見分けにくくなってきていることにある。サイバーテロや核施設攻撃、遺伝子レベルの生物兵器やクローン技術など、テロが狙う新たな標的が、実は、この時代の発明発見に内在する「危うい部分」に向けられていることが分かる。

（2001年9月19日）

21世紀版ダイマクション・マップ

東京・神宮前のワタリウム美術館で、バックミンスター・フラー展が開催されている。米国の建築家フラー（一八九五～一九八三年）は、作家、詩人、数学者、哲学者であり、振付師でもあった。ドーム建築や車の流線型のデザインなどに鬼才ぶりを発揮し「現代のダビンチ」と呼ばれた。

哲学者としての一面は、「ダイマクション・マップ」（一九四四年）という世界地図に象徴されている。地球表面を複数の三角形に分割し、平面に広げたもので、大陸が全てつながり合っている。国家主義の対立から汎地球主義へ。著書「宇宙船地球号」に込めた人類の未来へのメッセージが、その地

図から伝わってくる。

敵と味方の対立の構図に立った「ゲーム理論」に対して、フラアの「ワールドゲーム」には敗者がいない。かつて戦争というゲームだけに適用された世界地図を使って、全世界の問題を解決しようという発想だ。究極の楽天主義にも見えて、現実の危うさを衝いている。

新世紀冒頭のテロ・アフガン問題は、過去の大戦とは別の形で、対立と敗者が厳然と存在することを浮き彫りにした。そんな六人の大富豪と栄養失調の五十人が住む「百人村の話」が、地球問題解決の道具とフラアの予言したコンピュータを介して彼のマップ上を駆け回っているのは、何かの巡り合わせだろうか。

(2002年2月4日)

日本刀あれば憂いなし

憂国の文学者・三島由紀夫は、「行動学入門」の中で、陣地戦における「最後の五十メートルの空を越えての突撃では、合理的計算と計画は行き詰まり、それを打破するのは非合理的な精神力しかないのだ、という。

精神力を支えるものとして三島は「拳銃では不足」とし、「五十メートルを突破するものこそ日本刀にほかならない」とも断じている。そんな三島流兵法に従えば、今国会で論点となっている有事法案では、陣地構築に加え自衛隊員に日本刀を提げさせることも考えねばならない。

堅固な陣地を築けば突撃は不要とも思えるが、兵法では専守防衛に勝ちなし。空間の間合いは保ても、時間の間合いが攻撃側に力を増強させる猶予を与え、守る側は補給を前提に力を維持するのがやっただからだ。うーん。やはり、日本刀を振るわずにはいられないか。

「行動学入門」は、軟派の男性誌に連載されたエッセーを再編集したもので、学生運動の熱が冷め、どこか覇気を失った若者に向けたメッセージでもあった。そして三部構成の一作が「おわりの美学」。あとがきは一か月後の自決を予告したと話題を呼んだが、その内容は現代においても暗示的に思える。

(2002年2月22日)